

< 岩下壮一の福祉思想 > 研究ノート

- 既往の岩下論の検討を中心に -

輪 倉 一 広

Reviews on the Philosophy of Social Work in Soichi Iwashita

Kazuhiro Wakura

はじめに

従来、近代以降の日本においてキリスト教社会（慈善）事業⁽¹⁾とえばカトリックは除外されて考えられるのが一般的であった⁽²⁾。また、キリスト教思想においてもカトリックは同様に除外されてきた⁽³⁾。こうした状況を受けて、思想史を含むカトリックの社会（慈善）事業史研究においても、とりわけ社会（慈善）事業家の個別研究からカトリック社会（慈善）事業史研究一般へと普遍化させるようなものは、その層が薄いと言わざるを得ない⁽⁴⁾。

ところで、岩下壮一は近代日本のカトリック思想界をリードした中心の人物とされる⁽⁵⁾。しかし、また岩下は昭和戦前期の日本の救癩事業を担った一人でもある。カトリック司祭であった岩下の救癩実践は、20世紀前期という世界規模のイデオロギー的混迷の中で、否が応でも時代社会と密接に結びつかざるをえなかった。

本研究は、こうした岩下の救癩実践について、カトリック社会（慈善）事業への普遍化を見据えて思想史的に検討するものである。本稿はその序として、おもに思想形成の面から先行研究について検討することを目的としている。その際、まず岩下壮一の全体像を確認するために思想形成を含めた<生涯>についての概略を述べることにする。

岩下壮一の生涯（概要）

まず岩下の生涯について、既存の伝記とカトリック関係雑誌の岩下追悼号などをもとにしてその概要を述べよう。

誕生・就学・就職

岩下壮一は1889（明治22）年、実業家で聖公会の信者であった父岩下清周と、貴族出身で熱心なカトリック信者であった母幽香子の長男として東京に生まれた。幼いときの小児麻痺がもとで右足が不自由になったが、父親ゆずりの負けん気で何事にも積極的に進む少年であった。公立の板倉小学校からカトリック系の暁星小学部へ転入したが、当時優秀な生徒には特別進級が認められており、通常より2年早く同中学部へ進んだ。1901（明治34）年カトリックに受洗。中学時代は寄宿舎生活であったため、日常的に仏国人や米国人の教師に接し、フランス語や英語を習得した。

1905（明治38）年に一高文科甲類に合格したが、所要年齢に達せず、1年間入学延期となった。当時の一高生にとっては、ソシアリティに富んだ帝国主義者を育てるという教育理念を掲げた校長新渡戸稲造からの影響のみならず、無教会主義を唱えて独自の信仰運動へと導く内村鑑三からの影響も大きかった。そのような中で、岩下はドイツ語教師の岩元禎から哲学への指針を得た。岩下はのちに暁星の第3代校長となる恩師エック（Emile Heck）に相談し、1906（明治39）年暁星内にカトリック文庫を設立するとともに、暁星出身の戸塚文卿や山本信二郎らとともにカトリック研究会を起した。これは、日本にカトリック研究の本流を作り出す目的で作られたもので、当時の日本の混乱した思想状況を背景にしている⁽⁶⁾。この会はのちにカトリック・アクションの出発点となる公教青年会と、慈善団体であるヴィンセンシオ・ア・パウロ会に発展した。一高の同級生には生涯の親友となった九鬼周造のほか、児島喜久雄、天野貞祐、三谷隆正らがあり、また前後した同窓には、近衛文麿、山本有三、土屋文明、和辻哲郎、菊池寛、芥川竜之介、田中耕太郎などがいた。

1909（明治42）年東京帝大文学部哲学科に入学、哲学史教授でロシア正教からカトリックに改宗したケーベルとの師弟関係が始まった。思想史的に「教養主義」と呼ばれた1920年代における日本の代表的な知識人には、このケーベルからの影響を受けた人が少なくない⁽⁷⁾。入学の翌年、日本で最初のヴィンセンシオ・ア・パウロ会を戸塚文卿、小倉信太郎らとともに創設した。日本のカトリックの発展が、何よりも信徒の社会的活動（カトリック・アクション）にかかっていることを洞察してのことであった。1912（明治45）年、恩賜銀時計組の一人として優秀な成績で卒業。卒業論文の「神国論の歴史哲学」（仏文）は、ケーベル（Koeber, Raphael）から高い評価を得た。アウグスティヌスへの関心は、その後の岩下にとって思想家・哲學家への端緒となった。卒業に際して、文学部長上田萬年からエック（当時、東大講師を兼任）を通じて欧州留学の要請があった。これは、当時文学部で計画中の中世スコラ哲学講座の担当者として育成したいとの意図からであった。しかし、岩下は官費での留学により将来が拘束されることを嫌い、言下に断ったという。

卒業後、大学院に進んだ。進路について普通の司祭になるか、あるいは学者になるかの選択に苦慮し、その問題で東京大司教のレイ（Rey, Pierre）と会見を重ねた。その間、自発的に精神修養をなし、カトリック的信仰態度を身につけていった。ちょうどその頃、父清周は北浜銀行

事件により訴追され富士の裾野へ引退、不二農園の経営に当ることになった。

1915(大正4)年、ケーベルの帰国に同行して欧州留学を予定したが、第一次世界大戦のため取り止めることになった。翌年、自ら求めて友人の天野貞祐の紹介により、鹿児島第七高等学校英語教師として赴任。これは、地方で落ち着いて勉強するようにという岩元禎からの助言を実行する形で行われた。この事情については、もちろん父の引退とも関係があろう。七校赴任中に度々母親から縁談が持ち込まれ、結局、欧州留学から帰国後に結婚する予定で家政婦の女性と婚約した。しかし、岩下に積極的な結婚の意志はなく、むしろ進路への関心に心を奪われていたようである。

留学・司祭叙階・帰国

1919(大正8)年、文部省在外研究留学生としてカトリック哲学・神学研究のため欧州へ出発した。なお、1923(大正12)年まで七校教授の身分は続いていた。出発に際して開かれた送別会の席で、岩下は自分の進路選択についての経験を他のカトリック青年にも押し広げ「われわれカトリック青年のなすべきことは、今各自のもっている自分の務めを完全に全うしさえすれば、それでいい... (略)... 迷いながらもその人はどっかへだんだん進むようになるから、そのだんだん進んでいった方向が聖旨なのであって、真実、心から熱心に祈りつつ与えられたことに全力をつくせばそれでいいのだろう」⁽⁸⁾と語っている。このときには、すでに生涯を通じた岩下の使命感 - 日本カトリックの発展策いかに - が課題として明確に意識されていたといえよう。欧州では、パリのカトリック大学に学び、その後ベルギーのルーヴァン大学、ロンドンのセント・エドモンド大神学校、ローマのプロバガンダ大学、同じくローマのアンジェリコ大学へと転じた。とくにルーヴァン大学在学中およびロンドン滞在中には宗教哲学の泰斗フォン・ヒューゲル(Baron Friedrich von Hügel)に教えを受けた。また、ローマのアンジェリコ大学で教会史の権威ガリグー・ラグランジュ(Garrigou-Lagrange Réginald)から学んだ。後年、岩下は生涯の恩師として岩元禎、ケーベルと併せてこの2人の名前を挙げ、岩下とスコラ哲学をつなぐ契機として「フォン・ヒューゲル先生によってわたしはスコラ哲学と和解することができた。そうしてガリグー・ラグランジュ先生のおかげで聖トマス精神、スコラ神学の真髄とも呼びたいものと相触れることができた」⁽⁹⁾と述べている。

岩下は哲学的課題として、現実社会を説明するための学問に留まらず、社会を変革するための実践力を求めていた。つまり、唯物思想に陥っていた当時の日本人に対して、人間の真の目的としての神と霊的生活へ立ち返らせる方法を探求することにあつた。それに対するヒューゲルの指導は、まず岩下自身にキリスト教の真髄と原動力を理解させることに向けられた。なお、パリのカトリック大学ではジャック・マリタン(Jaques Maritain)の「哲学概論」の講義を受けた。このときの印象を日記に「あまり感心せず」⁽¹⁰⁾と記していたことからわかるように、当時の岩下はスコラ主義自体に対してあまり肯定的ではなく、マリタンらをとる新トマス主義に対しても懐疑的であった。しかし、ヒューゲルに指導を受けて以降は、中世思想としての

純粋なトマス哲学を再評価し哲学探究への指針を見出していくことになった。折しも、法王レオ13世の回勅「アエテルニ・パトリス」(1879年)によりカトリックにトマス哲学を再発見させる新しい哲学運動(新スコラ主義あるいは新トマス主義と呼ばれる)の伸展と軌を一にしている⁽¹¹⁾。

1925(大正14)年、ローマにて司祭に叙階された。この叙階は一般的には必ずしも容易ではないようで、たとえば岩下とともに司祭修養していた小倉信太郎が、召命なしとみて先に帰国したことと比べるとそれが理解できる。とくに1921年から2年余りのロンドンでの生活においては、岩下は哲学研鑽の一方で、修道的な生活を続けていた。司祭叙階後、パリ大司教の許可を得て日本布教のための祈祷会をつくり、スペインを中心に普及のための運動を展開した。同年、6年間の欧州留学を終え帰国した。

帰国後の岩下は、青少年教育や聖職者の養成のためにカトリック子弟等を預かり公教要理を教える「聖フィリポ寮」を設立し、カトリック講義や学生指導を行った。また、「カトリック研究社」を開設し、『カトリック研究叢書』や『カトリック研究』などの出版、著述に当たった。さらに大神学校や大学等での講義・講演など、学者的な司祭として積極的に活動を展開した。そのような中、1928(昭和3)年に父清周が急逝した。葬儀での岩下の式辞は、父の罪滅ぼしのため「国家民人の福利の為に最善の力を尽したい」⁽¹²⁾というものであった。父が援助していた救癩施設「神山復生病院」との結びつきは、このことが契機となっている。父の死後、従前の活動に加えて不二農園の経営(1920年に父清周により農園敷地内に創立された「温情舎小学校」の理事長兼校長もつとめていた⁽¹³⁾)を行った。同時に、神山復生病院の第5代院長であるレゼー(Droüart de Lèzey)への援助も受け継いだ。

神山復生病院院長・辞任・死

1930(昭和5)年、東京大司教の任命によりレゼーの後任として神山復生病院の第6代院長に就任した。もとより、岩下の意思によるものであった。就任後は病院に住み込み、従前の仕事とともに病院管理と癩患者の生活・宗教指導等に当たった。折しも、この年貞明皇后が全国の救癩事業に対する継続的な援助を発表した⁽¹⁴⁾。その後の官民による癩根絶の全国的運動が展開する契機は、まさにこの「皇恩」にあった。

岩下は病院が当面している問題を4つに整理し、院長就任の翌年から改善5カ年計画を立て実施した。それらは、病院としての医療施設の整備 衛生・消毒設備の徹底的改善 専任医師の常勤化と専門医の招聘 患者の生活の向上である。岩下がこうした計画を打ち出した背景には、1931(昭和6)年の「癩予防法」(法律第58号)により、私立療養所にも官庁の監督が行われることになったことがあげられる。しかし、岩下の行った、の改善は徹底しており、公立療養所の水準はもとより、一部はそれを抜いていた。こうした岩下を、田代菊雄は「医療施設として、最新の施設・設備の整備を行っていて、カトリックで科学的社会事業を取り入れた、先駆的人物」⁽¹⁵⁾であると評している。また、については、たとえば野球を院内娯楽とし

て奨励し、対外試合を実施するなど開放的な処遇を行ったことが挙げられる。ただ、¹⁵については、岩下の院長時代に成果を得ることはなかった。

岩下が院長になった翌年、その後の思想的発展を方向づける出来事が起きた。患者の臨終に立ち会う最初の経験であった。患者の衰弱は激しく、司祭としての霊的な援助も困難な状況であった。癩菌に蝕まれて抵抗するすべさえなくなった患者を前にして、岩下は「私はその晩、プラトンもアリストテレスもカントもヘーゲルも、みなストーブの中へ叩きこんで焼いてしまいたかった」⁽¹⁶⁾と感想を述べている。それまで自身が探求してきた哲学は、現実の癩菌の前にもろくも瓦解したのであった。しかし、これは岩下にとって哲学の新しい意義づけへの契機ともなった。岩下はその後、「(癩患者の - 引用者注) 呻吟こそは最も深い哲学を要求する叫び」⁽¹⁷⁾であることを感得するのである。

約10年にわたる救癩実践は、カトリック的<犠牲>のもとに続けられた。1940(昭和15)年、後任の千葉大樹に院長職をゆずり病院管理の第一線から退くことになった。院長職に代わって、未感染児童の養・教育に当る覚悟であった。しかし、辞任直後に興亜院からの要請で北支天主教会関係者との意思疎通のための調整を依頼された。そこには、北支那を精神的にも日本の統治下におこうとする日本政府の思惑があった。結局、約1ヶ月の工作活動の後帰還するが、神山へ帰着と同時に病臥、ついに帰らぬ人となった。享年51歳であった。

参考文献

- (1) 小林珍雄『岩下神父の生涯<伝記・岩下壮一>』(『岩下壮一全集』別冊)中央出版社、1961。
- (2) 『カトリック研究』第21巻2号、カトリック中央出版部、1941。
- (3) 『黄瀬』第4巻、神山復生病院落葉社、1955。
- (4) 『聲』第780号、第781号、第785号の各号、カトリック中央書院、1941。
- (5) 『感謝録』第2集、財団法人神山復生病院、1937。
- (6) 百年史編集委員会編『神山復生病院の100年』春秋社、1989。

既往の岩下論について

人物史としての岩下研究(論)は概ね次の人たちによってなされている。小林珍雄 増田和宜 遠藤興一 田代菊雄 柴田善守 森 幹郎 藤野 豊 田中耕太郎 吉満義彦 大庭征露 モニック原山 半澤孝麿 井伊義勇 神山復生病院百年史編修委員会

他に、『カトリック研究』(カトリック中央出版部)誌や『黄瀬』(神山復生病院落葉社)誌の岩下追悼号や、若干のノンフィクション小説等がある。上記のうち、¹⁸は伝記の著者であり、全集の編集も行っている。¹⁹は全集および一巻選集の編者である。²⁰は社会福祉研究者である。²¹はハンセン病医療政策史(政治史)の著書の中で部分的に取り上げている。ま

た、は法学者、は哲学者であり、この3者は『カトリック研究』誌の岩下追悼号に寄稿している。その内容はどれも思想史といってよい。は岩下の追慕者のひとりであり、岩下の遺稿及び関係者からの寄稿による選集をまとめている。には政治思想史としてみた岩下論がある。は元雑誌編集者であり、一般啓蒙書として岩下論をまとめている。はおもにノンフィクションを手がける小説家である。以下、～の論者およびの施設史における岩下論についてその内容を検討しながら評価してみたい。

小林珍雄

小林珍雄は『岩下神父の生涯＜伝記・岩下壮一＞』（『岩下壮一全集』別冊、中央出版社、1961）（以下、伝記と略す）の筆者であり、この全集の他の巻の編者でもある。また、「岩下師に最も近く接し指導を受けた一人であり、師の種々の活動に秘書的役割を果たし、最後の中国旅行も共にした人」（伝記、解説1頁）であり、伝記中では岩下の事蹟を詳しく記述している。この伝記は、日記等の手記類の入手が困難な現状では、岩下の生涯の全体像をつかむための基礎文献となっている。しかし、通時的な生涯の展開が把握しにくいという難点がある。これは、岩下の諸活動や思想形成が広がりをもちすぎており、単線的な記述を困難にさせたためではないかと思われる。

現在までの諸岩下論はこの伝記の記述に負うところが大きい。

増田和宜

増田和宜は『岩下壮一全集』全9巻・別冊（中央出版社、1961～62）（以下、全集と略す）および『岩下壮一・一卷選集』（春秋社、1969）の編者の一人であるが、その中に自ら「知と愛の信仰 - 岩下壮一師の生涯から - 」という一文を載せている。これは、岩下の生涯を一貫した思想軸で整理している。それは、題の示すとおり岩下の生涯における諸実践が「知と愛と信仰」とで渾然と一体化しているというという見方である。こうした観点は、キリスト者としての岩下を説明するためには合理的なモデル化ではあるが、余りに平準化しすぎており、必ずしも現実の思想形成を投影しているとは言いがたい。

遠藤興一

遠藤興一は「日本における社会事業の近代化とカトリシズム - 岩下壮一小論 - 」（『基督教社会福祉学研究会』第10号、日本基督教社会福祉学会、1977）において、カトリック慈善事業の一般的な特徴から岩下理解へのアプローチを試みている。まず、岩下の思想的基盤を形作ったカトリックの時代背景について述べ、次にカトリックのカリタス概念を、以後はカトリックの一般理論を応用して岩下の戦争観、岩下の社会事業における実践の性格、最後に皇室観を論じている。

遠藤は、福祉思想史をもっぱら研究領域とするキリスト者である。しかし、岩下の慈善思想

をとらえる視点は「カトリズム」における主体論に限局されたものに終わっている。つまり、「癩」をめぐる特殊な社会事情と救癩史の視点が全く欠落していることで、岩下の実践における対象との関わりが捨象されている。

田代菊雄

田代菊雄は『日本カトリック社会事業史研究』（法律文化社、1989）の中で、大正・昭和初期における修道会以外の重要な事業の一つとして「岩下壮一と神山複生病院」の項目を設け、まとめている。岩下の実践に対しては「カトリックで、科学的社会事業を取り入れた先駆的人物」（同書、143頁）と高く評価している。また、この時代の大きな特徴として一般信徒による活動への参加を挙げ、その先駆として岩下らが創設したカトリック研究会、ヴィンセンシオ・ア・パウロ会を位置づけている。

本書全体については、何よりも類似の研究書がほとんどないことと、カトリック社会事業施設史として単なる列挙に留まらず、時期区分によりそれぞれ体系的に意義を考察している点で一定の評価がされている⁽¹⁸⁾。しかし、社会事業家個々の実践については十分に検討が加えられていないというマイナス面もあるため、結局岩下の社会事業も外形的にしかとらえられていない。

柴田善守

柴田善守は「連載・人物で綴る社会事業の歩み<10>」（『月刊福祉』第10号、全国社会福祉協議会、1968）で岩下を取り上げている。柴田には石井十次研究の実績がある。岩下の評価については、石井十次と比較して「この岩下^(ママ)生涯にも一貫して自由が感じられる。人間とか国家との束縛^(ママ)からのがれ、神の意志によって行動する」（同書、41頁）人であったとしている。雑誌の一般向的性格によるが、全体的に賞賛的記述に終始している。しかし、部分的にであれ岩下の人間性をよく捉えていると思われる。

森 幹朗

森幹朗は、『足跡は消えても』（財団法人日本生命済生会、1963）で、その一部として岩下を取り上げている。本書は、救癩事業に尽力した社会事業家を挙げ、その各実績をまとめたものである。この中で森は、特に「民間社会事業の使命・限界を洞察していた」（同書、53頁）として他の岩下社会（慈善）事業論に見られない重要な論点を提起しており、この観点は今後継承される必要があるだろう。実際、岩下に関わった昭和戦前期の民間社会事業は、資金難と公的社会事業の台頭により、その存在意義の議論に至らないまでも、それにつながる危機を内包していたのである⁽¹⁹⁾。

藤野 豊

藤野豊は著書『日本ファシズムと医療』（岩波書店、1993）で、かつての誤ったハンセン病医療政策を実証的に批判論証している。その中で、政策主導による民族浄化思想の普及に加担して活動した民間社会（慈善）事業家のひとりとして岩下を取り上げている。しかし、岩下の主張した民族浄化は、強制隔離というマクロな方法のレベルにおいてはそうした一般的な思潮と一致していても、癩患者個々の人間存在に対する思想のレベルでは必ずしも排他的であると断定できない。それゆえ、ナチスのユダヤ民族弾圧に代表されるような優生主義の思想を岩下にあてはめるのは少し短絡的過ぎると言えよう。

田中耕太郎

田中耕太郎は岩下の後進の一人であり、追悼文「岩下壮一と現代智識階級」（『カトリック研究』第21巻2号、カトリック中央出版部、1941）において、岩下が当時日本の知識階級にカトリックを普及させた功績を、彼の生涯の歩みを通じて意義づけている。岩下の生涯実践の枢軸に「知識階級へのカトリック布教」（同誌、51頁）をとらえたことは、一見、救癩事業実践と整合が取れ得ないかに見える。確かにプロテスタントを基準に考えると、信仰行為（含、伝道）と慈善とを区別して理解される傾向があるが、カトリックの信仰姿勢においては、結果的に慈善は救いに直接必要な条件となるので、慈善と宗教の関係は一元的に把握できるものである。そのゆえ、田中の捉え方は妥当性をもってくる。

つまり結論として、田中は両者の関係を切り離すのではなく「此の二つは相互に無関係なことではない。師は我が智識階級に無数の智的な種子を蒔かれたと共に、又智識階級の生活態度に身を以て示されたのである」（同誌、62頁）と相乗的に意義づけている。

したがって、田中の岩下論は一つの有用なモデルになり得るといえよう。なお、田中は『カトリック研究』誌の翌年の号（第22巻1号）で、前述の増田と同様の題で追悼文を書いていることから、結果的には岩下が理性と信仰の統合化を進めたとする見方はより正当性をもつと判断される⁽²⁰⁾。

吉満義彦

吉満義彦は宗教哲学における岩下の後継者といわれている。「基督教思想家としての岩下壮一師」（『カトリック研究』第21巻2号、1941）の中で、岩下の思想を理解する上での2面性について、「哲学的思想要求の側と実践的原理把握要求の側からと両面よりして師は聖トマスの神学体系の理解把握ということを矢張りもっとも深き関心としていられたことは信ずるに難くない」（同誌、145頁）と分析している。また、彼の人間性については恩師ガリグ・ラグランジュの影響を受け、カトリック的信仰生活における霊的完成としての神愛（カリタス）を常識のレベル（民衆性）で応用しようとしたところにその特性が見られると評している（同誌、147頁）。また、岩下の慈善実践の根底にある思想は、カトリックの他の全ての実践と同じよう

に<犠牲>からのものであることもあわせて指摘している。

吉満は思想的に最も近い者として、岩下の福祉思想を検討する上で重要な示唆を与えてくれる。しかし、岩下がプロトタイプとしての中世スコラ哲学にこだわったのに対して、吉満はマリタンに師事し、近代科学とスコラ的な統合を図ろうとする近代思想としての新トマス哲学の方向に進んだのはなぜかという、両者の思想形成における立脚点の違いに十分注意する必要がある。

大庭征露

大庭征露は『カトリック研究』（第21巻2号、1941）において、「二つの噂」という題で岩下像を描き出している。その噂とは、「岩下さんは余に学者的だ」というものと「中世哲学の研究はカトリックでなければ駄目だ。岩下が九鬼がやるだらうと思っていたら二人とも脱線してしまった」というものであった（同誌、152頁）。このことを、大庭は岩下という一個人の中で「宗教家」と「学者」がどのように関連しあって共存・発展したかという点から論じている。その際、説明に用いられる重要な概念はトマス（Thomas Aquinas）の哲学思想における「理性」と「信仰」の関係概念であり、たとえば岩下の思想形成におけるアンビヴァレンスを「理性と信仰との相克による統一的人生観の欠如」（同誌、156頁）ととらえて解釈を展開している。岩下の生涯における思想形成を、直接トマスのこうした哲学思想と結びつけて考えた点は、岩下の思想を発達史的に理論化したという意味で評価できよう。

しかし、なお一歩進めて考えれば、こうした観点からの理論化は、「理性」と「信仰」による探求過程を通して到達する目標としての真理（対象）を明確に意識して考察するのではなく、人間（主体）を中心に進めるあまり、真理の相対化と主体の絶対化がなされる危険性をはらんでいる⁽²¹⁾。大庭はそのあたりについて必ずしも明確に述べていないが、岩下があくまでもこだわったのは近代思想と妥協した新スコラ主義ではなく、中世思想・哲学としてのトマスに代表されるスコラ哲学であった。それゆえ、岩下論の理論化については主体から対象への予定調和的なアプローチが必要であろう。

モニック原山

モニック原山は『キリストに倣いて（岩下壮一神父永遠の面影）』（学苑社、1991）及び『続キリストに倣いて（岩下壮一神父・マザー亀代子・愛子の追憶）』（学苑社、1993）の編者である。この2点はどちらも、岩下の主要な著述（小論）と関係者からの寄稿からなっている。その中には、新しく起稿されたものも入っており、貴重な選集的文献と言えよう。また、この2点には、原山自身の起稿文もいくつか掲載されている。中でも原山自身による「癩医林文雄博士と岩下神父」では、岩下の癩院経営に当たった動機をフィリポ・ド・ネリ（Filippo de Neri）に倣ったことであると指摘している。原山の岩下論のとらえ方は、周辺から外堀を埋めて岩下の中心へと進んでいく方法である。一方、伝記の著者小林も、癩院経営にいたる動機にまで

は言及していないが、学生指導や母国のカトリック布教についてなどネリとの共通性を指摘している（伝記、126・27頁）。それゆえ、両者は岩下論へのアプローチの違いはあっても、ほぼ共通した理解に至っているといえよう。また、原山が岩下を捉える視座は、前述の増田のアプローチと共通した思想を下に展開されている

半澤孝麿

半澤孝麿は著書『近代日本のカトリシズム - 思想史的考察 - 』（みすず書房、1993）で、近代日本の中で少数派のカトリック者が、現実の国家や文化とどのように関わりをもってきたかという視点から、岩下壮一、吉満義彦、田中耕太郎の3人をとり上げ、それぞれについて思想史の立場から論じている。半澤は、この3人を昭和初期の日本キリスト教思想界に確固として存在したカトリックの思想集団と位置づけ、その中心人物として岩下を挙げている。

もとより政治思想史が専門の半澤の関心は、人を政治的主体者として捉えるところにあるので、岩下を組織や社会、国家といった所与の関係下で分析する手法を取る。このことは、岩下のカトリック社会観の分析には適しても、よりミクロな人間観の分析には不適であるといわざるを得ない。実践思想史としての分析には、やはり両面からのアプローチが求められる。

井伊義勇

井伊義勇は過去に『中央公論』編集者の経歴をもっており、岩下論を最も早い時期にまとめた一人である。ただ、著書『復生の花園 - 救癩の慈父・前復生病院々長岩下壮一神父の生涯 - 』（一路書苑、1941）の「序」で井伊が述べているように、本書は事実を体系立てて整理した伝記ではなく、あくまでも一般啓蒙書と呼べる類のものである。つまり、岩下の生き方に共鳴した著者が、岩下の死後まもなく現地へ足を運び事実資料を集め、一評伝の形でまとめたものである。評伝ということもあり比較的良好に岩下像を結んで整理しているが、記述は主観的傾向が強い。

百年史編集委員会

百年史編集委員会編『神山復生病院の100年』（春秋社、1989）は、歴代院長それぞれの功績を一通りまとめたものである。岩下の時代は病院発展史上「大地に根を張る」（同書、見出し）時期としている。本書は病院の百年史という性格上、おもに施設・制度・処遇の各改善という発展史的視点で書かれている。しかし、岩下の院外での活動についてはほとんど触れられていない。ただ、当事者（経営）側の編集でありながら、記述面については客観性が確保されている。その意味で社会（慈善）事業施設史研究や人物史研究（とりわけ実践面の把握）には欠かせない文献である。

なお、神山復生病院の元関係者（職員、患者など）からの聞き取り等を基にした次の3点

(ノンフィクション小説)も、とくに岩下の患者処遇観を理解する上で有用である。

小坂井澄「人間の分際～神父・岩下壮一」(『聖母の騎士』聖母の騎士社、第56巻6号(1990)-第60巻12号(1995))⁽²²⁾

小坂井澄『ライと涙とマリア様 - ハンセン病100年 - 』図書出版社、1989。

重兼芳子『闇を照らす足あと - 岩下壮一と神山復生病院物語 - 』春秋社、1986。

とくに、 についてみると、これは岩下の生涯をまとめた内容のものである。全集の出版以降、生涯を詳細に記述した初めてののものである。事実資料を参考にして岩下の生涯を詳細かつ連続的にたどっている点で、小林による伝記よりも時系列的展開が理解し易い。しかし、当然のことながら学術的な史料価値は低いし、事実を因果関連でつないただけでは岩下論になりえない。つまり、抽象化がなされていないといえる。

ただ、とくに患者処遇面の記述については、元関係者(元患者・職員など)からの聞き取りを基礎に記述しており、岩下の実践を検討する上で有用な資料となる。

おわりに

岩下研究は、本人あるいは関係者の日記・書簡、神山復生病院の保存諸資料等の一次資料が確認されない以上、一定の限界があることは否めない。おもに全集を用いて社会事業史の視点から初めて客観的に検討された遠藤の岩下論、さらに近年では、半澤のように全集を中心とした既存の文献を用い思想史の視座から改めて岩下(と昭和初期)を見直す研究もみられるが、それ以外は既往の岩下論を止揚するような研究は見あたらない。その理由は、カトリック(普遍)なるがゆえに社会変動とは無関係とみなされることで、研究のモチーフとして新しさを欠くと見られるからであろうし、また資料の限界の問題もあろう。没後60年を過ぎて、同時代人として岩下を語る人がほとんどいなくなったことは、フィールドでの聞き取りを困難にさせ、岩下研究の幅と深さをさらに減じることになりはしないか。

また、カトリックの社会福祉史研究は、前述のようにプロテスタントのそれに比べて層の薄いものであるといわれている。概観してきたように、近代日本のカトリック思想家を代表する岩下壮一についても、これまで本格的に取り組まれたものがほとんどなかった。このような状況にあって、岩下の救癩実践を思想史的な視座により、時代・社会の各制約の中でどのように評価するかという研究領域は、まだほとんど手を着けられていない状況といえる。今後の岩下研究の発展のためにも、まず神山復生病院の所蔵資料が公開されることを望みたい。

なお、岩下の思想家としての主要な業績は『信仰の遺産』(神学的宗教論集)、『中世哲学思想史研究』(精神史哲学論集)、『カトリックの信仰』の3冊である。

注

(1) たとえば、遠藤興一が「日本における社会事業の近代化とカトリシズム - 岩下壮一小論 - 」(『基督教社会福祉学研究』第10号、日本基督教社会福祉学会、1977、23-24頁)で指摘しているように、この時代のカ

トリックの社会的奉仕活動を「慈善」と呼ぶか「社会事業」と呼ぶかの問題はあがあるが、本稿では基本的に取り上げた論者の用い方にならない、それ以外は併記とした。

- (2) たとえば、田代菊雄『近代日本におけるプロテスタント・カトリック社会事業の展開とその意義』『キリスト教史学』vol.48、キリスト教史学会、88頁参照。
- (3) 半澤孝磨『近代日本のカトリシズム - 思想史的考察 - 』みすず書房、1993、2頁参照。
- (4) 丸山雅夫「田代菊雄『日本カトリック社会事業史研究』を読んで」『商学討究』vol.41, No. 1、小樽商科大学経済研究所、1990、119頁参照。なお、個別の社会事業家についての伝記以外で既往のカトリック社会事業史研究としては、本稿で取り上げたもの他に、わずかに田代不二男『社会福祉とキリスト教』(相川書房、1983)が挙げられる程度である。
- (5) 大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002、104頁参照。
- (6) 菅井鳳展「明治後期における第一高等学校学生の思潮 - 『校友会雑誌』を中心に - 』『シリーズ日本近現代史 - 構造と変動 - 』第2巻、岩波書店、1993参照。
- (7) 荒川幾男「一九三〇年代と知識人の問題 - 知識官僚類型について - 』『思想』No.624、岩波書店、1976参照。
- (8) 小林珍雄編『岩下神父の生涯(伝記・岩下壮一)』(『岩下壮一全集』別冊)中央出版社、1961、93-94頁。
- (9) 小林珍雄編『岩下壮一全集』第9巻、中央出版社、1962、250-251頁。
- (10) 前掲(8)書、108頁。
- (11) 下中邦彦編『哲学事典』平凡社、1976、746,752頁参照。
- (12) 故岩下清周君伝記編纂会編『故岩下清周君伝』(復刻版)大空社、1931、55頁。
- (13) 温情の灯会編『われらが学び舎温情舎』同会、2001、33頁参照。
- (14) 財団法人藤楓協会編『創立三十周年誌』同協会、1983、5頁参照。
- (15) 田代菊雄『日本カトリック社会事業史研究』法律文化社、1989、143頁。
- (16) 小林珍雄編『岩下壮一全集』第8巻、中央出版社、1962、203頁。
- (17) 前掲(9)書、10頁。
- (18) 前掲(4)丸山書評、113頁参照。
- (19) 吉田久一・一番ヶ瀬康子編『昭和社會事業史への証言』ドメス出版、1982、268頁参照。
- (20) ヨゼフ・フービー著、戸塚文卿訳『カトリック思想史』日本カトリック刊行会、1927、341頁参照。実際、19世紀末にカトリック教会はトマス思想への回帰を宣言したが、そこではこの理性と信仰の関係の問題がトマス思想の中心的なテーマとして研究奨励されたのであった。
- (21) R・ロペス・シロニス「中世思想における理性と信仰との関係の特徴をめぐって」『カトリック研究』上智大学神学会、1989、262頁参照。
- (22) 現在、文庫本『人間の分際』(聖母の騎士社、1996)が出版されている。